

MARS

国谷隆志展

:Takashi Kunitani Exhibition

「PARC_Creator Support Project」は、現在活躍する・またこれから注目を集める様々なクリエイターを取り上げ、その活動をサポートするものです。

京都を拠点に活動を続ける国谷隆志(くにたに・たかし)は、これまでおもにオブジェや彫刻を核に、設置空間を巧みに取り込むインスタレーションによる発表を続け、とりわけネオンを用いた一連の作品は、「ある環境や状態」を創出することで、空間そのものを変容させながら、そこに内包される鑑賞者の身体感覚に強く働きかける試みとして、注目されています。

約3年ぶりの個展となる本展では、PARCの空間の特性を活かし、鑑賞する時間帯によっても大きく印象の異なる作品を展開をさせます。

【国谷隆志】 <http://takashikunitani.com/>

1974 京都府生まれ

1997 成安造形大学 立体造形クラス卒業

個展:

2008 Untitled Series (Contemporary And Spirits CAS/大阪)

2007 The Vertical Horizon (大阪府立現代美術センター/大阪)

2005 国谷隆志展 (Contemporary And Spirits CAS/大阪)
2005 a piece of work : KUNITANI Takashi Exhibition (APS /東京)

2004 Between Ground And Sky (YAEMON /京都)

2004 What you have known for some time (ギャラリーココ/京都)

2003 YOUR PRIVATE SURROUNDINGS (YAEMON /京都)

2003 クリテリウム54 (水戸芸術館/茨城)

グループ展:

2011 モトコーART train (神戸元町高架下通商店街/神戸)

2010 NEW WORKS「接続熱源」(ギャラリーほそかわ/大阪)

2010 Food for the senses (海岸道ギャラリーCASO/大阪)

2009 MASSIVE PROGRESSION (ギャラリーアーティスロング/京都)

2008 LOCUS (神戸アートビレッジセンター/神戸)

2008 Art Court Frontier 2008 #6 (アートコートギャラリー/大阪)

2008 第11回 岡本太郎現代芸術賞 (岡本太郎美術館)

コレクション:竹中工務店東京本店

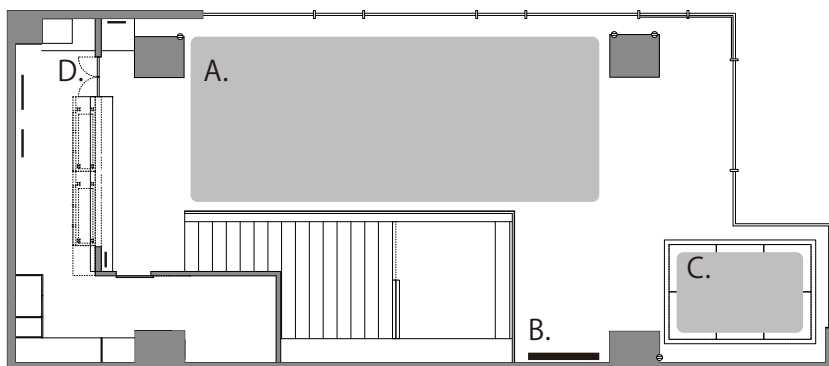
【アーティスト・トーク】

2011年10月25日(火)19:00より、ダンスカンパニーモノクローム サーカスを主宰・坂本公成氏をゲストにお招きしたアーティストトークを開催。

【坂本公成】

別府現代芸術祭2009でのオリエンテーリング型ダンス作品『ダンサーを探せ!!』、grafとのコラボレーション、瀬戸内国際芸術祭2010での『直島劇場』や家具と身体の間答『TROPE』など「身体との対話」を軸に、そのリサーチを空間・都市・建築などへと拡げている。

A. Spaceless Spaces - 2011	2011.	ガラス、ネオン、アルゴン、水銀
B. Untitled (Yellow)	2011.	ガラス、ネオンチューブ、水銀、変圧器、鉄
C. Breath History (Aug. 2011~)	2011.	ガラス
D. Untitled01~04	2011.	塩化ビニールシート、糸、紙
E. Air Conditioner	2011.	モーター、羽、空気 *1階ウィンドウ部分作品



【ステイトメント:国谷隆志】

空間と私の距離。

人間と空間は、深く複雑に絡み合った関係である。空間というものの存在を考える上で、身体を抜きにすることは難しいだろう。

それは、私たち人間の身体が常に空間の中に置かれているのと同時に、空間を「自らのもの」とすることによって環境を捉えているためだ。

作品が身体に働きかける時、私たちは感覚と思考によりそれを把握し、統合する。作品は単なる物質として捉えられるのみではなく、場として身体の一部となる。それは論理や認識のレベルではなく、内面的な領域へと思考を拡大していくことである。

観客が作品によって示される空間に立ったとき、身体を経由して観客自身の意識の中に起こる出来事は、あまりに客観性に欠けた不確かなものかもしれない。しかし、「今、ここにある、場」が「身体が、今、ここにある」ということを強く自覚させる事ができると私は考えている。

私は作品が観客の意識の中で、新たな意味や世界観を創りだす、装置のような機能を果たすことが出来ればと考えている。

また、私は空間への関わりにおいて、自分を取り巻く世界・物事についてのあり方を問うこと、また、それらとどのように向き合うのか、といったことに関心がある。

観客自身の位置・身体を起点とした空間把握は、視点の移動や時間の経過による変化を受けながら、常に自らの存在を問い、示すことに繋がる。

作品の意味は観客の体験によって成立し、観客の参加そのものによって完成する。

あなたの存在と私の存在によって作品を完成へと導くことを、あなたの存在と私の存在の証明とする。

本展覧会は火星[Mars]の存在について言及するものではありません。

私たちは科学技術の進歩により、遙か遠くの火星の大気構成要素や大地の成分、地表の様子やその変遷など、火星についてのある程度の「知識」により、その存在を知ることが出来るようになってきました。

しかし、本当の意味で火星を「知る」には、火星という状況・状態と接触し、それを体験する必要があるのではないのでしょうか。

私たちの知識の中にある火星は、自らの手で触れる事、ましてやその上に立つ事などできるはずもない、つまり火星はまるで未知の存在のままではないのでしょうか。

本展覧会はギャラリーをサイトスペシフィックな空間として、ある状況や状態を設定し、鑑賞者と作品・空間との間に様々な関係性が生まれることを促す試みです。

自らを包み込む空間を経験することで、鑑賞者の意識は作品・空間・身体との関係についてなど、様々なものに向けられるのではないのでしょうか。

そして、「なぜMarsなのか?」といった疑問は、「Marsとは何なのか?」という疑問に変わっていくでしょう。